

実践事例 1

「討議（ディベート）・ディスカッション」の学習と評価

『オリジナル版コミュニケーションの法則』を作る』の指導

一 はじめに

「話し合う」ことは、他者を認め、他者とのかわり合いの中で新たな認識を深めていくことである。つまり、そこには「対話する力」がなくてはならない。生きた対話を作り出すためには、次のような要素が必要であろう。

(1) 話す必要感と目的があること。

(2) 話し合い(コミュニケーション)の知識があること。

(3) 自分のコミュニケーションを振り返る力があること。

このような点を視野に入れ、生きた対話ができる力を伸ばしていくために、以下のような実践を行った。

以降に詳しく記すが、ディベートそのものを取り上げた学習ではなく、学習の中に一部ディベートの手法を取り入れ、対話しやすく、話し合いが深まることを意図したものである。

また、生徒の学習意欲を高めるよう、話し合いがただの練習に終わらず、自分たちの生活の中に形として残るような活動の流れを工夫した。

二 指導の計画

「クラスの『オリジナル版コミュニケーションの法則』を作る」
(二年生・七時間)

◎計画を立てるにあたって

本実践は、ディベートの手法を活用しながら、日ごろ自分たちが直面している難しい対人関係について解決策を出し合い、それらをまとめてクラス独自の小冊子を作ろうとするものである。

ディベートは、一つの論題をめぐって、二つの異なる立場を設定し、チームで考えたり、リサーチしたりして、双方の考え方の違い・価値観の違いをぶつけ合いながら、主張をまとめていくというものである。話し合いの中で、仲間に対する新たな発見があったり、自分の意見を支えてくれる喜びがあったりと、生徒たちが知的な喜びを感じることも期待できる。また、二つの立場の違いから、話す側にとっても聞く側にとっても、論点を明確に意識しやすいという利点もある。

そこで、本実践では、話し合いの中で一つの結論を出

すためのアイデアとして、ディベートの手法を活用することにした。

ここでの学習の前にも、生徒たちは、何回かのディベートを経験しており、それぞれの立場に沿って、自分の主張を、根拠をもとに話していくことや、相手の意図をしっかりとらえて聞くことの大切さや難しさを学んでいる。しかし、他者とかかわり合う力を確かなものにするために、協同的な活動を通して問題を解決する場を設け、かわり合う力(対話力)を高めようと思図した。

また、最終的に、ここでの話し合いが、自分たちの生活に役立つもの・参考になるものとして形に残ること、話し合いが実の場となり、生徒の学習意欲も高まるのではないかと考えた。

◎学習の目標

・グループでの話し合いをもとにして、クラス独自の「コミュニケーションの法則」を作る。

◎指導の目標

・話し合いを通して、新たな認識をもたせる。
【関心・意欲・態度】
・相手の話を受け止め、結論へとまとめることを考えながら、話し合いを進めようとする態度を育てる。

【関心・意欲・態度】

・話す・聞く・話し合う活動に必要な技能を身につける。

【話す・聞く】

三 学習活動の実際と評価

【第一次】

学習の見通しをもち、話し合いのイメージをつかむ。

(二時間)

学習の冒頭で、『コミュニケーション100の法則』(ディスカヴァー)という本を提示した。この中には、さまざまなコミュニケーションに関する小さなアドバイスを載っており、「このクラスの『オリジナル版コミュニケーションの法則』を作ろう!」という呼びかけに比べると、生徒たちから、たいへん前向きな反応が返ってきた。

次に、話し合いのしかたに関する知識を得るために、NHKで放送されている『真剣10代しゃべり場』のビデオを視聴した。「相手にうまく反論するためには、どうしたらいいか。」「話し合いはどう終わらせればいいか。」「話し合うことには、どんなプラスがあるか。」という観点でビデオを観て、気がついたことを出し合った。それぞれに多くの意見が出て、この経験が、次からの学習モデルづくりとして、大きな意味をもった。

「日常生活において、相手とのやりとりで困ってしまつたとき」「人とかかわりの中で、うまくいったこと、いかなかったこと」という問いかけをしたうえで、自分たちの話し合いのテーマを探すよう指示したが、二十四のテーマが集まった。

「評価の方法」・自己評価

・観察による教師の評価

【第二次】

ディベートの方法を用いて、問題の解決策を話し合う。

(三時間)

第一次の学習で集めたテーマをグループごとに話し合つて、解決策を見つけていく段階である。話し合いのグループは、一グループ四〜五人編成とし、「話すための内容をもつことができるか」「話し合ったための技能を身につけているか」という観点から、同じような力をもつ者同士で構成した。また、グループの中の一人をリーダーに任命し、進行役を任せることにした。

テーマに対する解決策を見つけるために、ここで、ディベートの手法を用いた。グループ内で、一つの問題に対する仮の答えを作り、それに対して「賛成・反対」の立場をとりながら是非を論じ合うのである。

本来のディベートではなく、ディベート的なやり方では

四 実践の成果と今後の課題

本実践では、話し合いを深めるためのアイデアとして、ディベート的なやり方を取り入れたが、お互いのかかわり合いを深めていくのに、たいへん有効であることがわかった。また、協同的な学習活動を通して一つの結論を出していくという設定が、生徒たちの学習意欲を高めたことも確かだった。

今後の課題としては、生徒が必要感をもって話し合うことができる話材を開発していくこと、個々の話す力や聞く力を段階的に評価しながら学習を進めていく方法の工夫が挙げられる。



▲ 資料1 グループでの話し合いの流れ

あるが、このように「賛成・反対」どちらかの立場に立つて論じ合うことで、それぞれの主張が明確になるとともに、意見ががみ合いやすく、お互いがかかわり合うことが容易にできた。生徒たちは生き生きとよく話し合い、どのグループも、選んだテーマについて、自分たちなりに納得した解決策に至ることができたようだ。(資料1)

「評価の方法」・自己評価

・話し合い結果用紙による教師の評価

【第三次】

話し合ったことをもとに、「オリジナル版コミュニケーション」の冊子を作る。

(二時間)

第二次で話し合った結果をもとに、一人が「原稿を担当することとして」「オリジナル版コミュニケーションの法則」の冊子作りにかかった。自分たちが十分に話し合ったことだけに、原稿を書く段階では、どの生徒もスムーズに筆が進んでいた。一つの原稿は二百字程度として、各自がパソコンでレイアウトをしながら清書し、そのうえで印刷・製本をして、一人一人の手に届くようにした。(資料2)

「評価の方法」・自己評価

・原稿による教師の評価

・読み合いによる相互評価

◀ 資料2 「オリジナル版コミュニケーション」の法則

「もう〇〇さんと【君】とはお付き合いするのやめなさい」と言われた時・・・

その友達と本当にまだおつきあいたいと思うのなら、親に、その人のいい所をアピールしてあげればいいのです。それでも・・・悩まない時は、自分の意志をしっかりとって、お

と思ったことに責任を持

短気な人と話す時はどうすればいいのかなあ？

最初は、相手の怒りに触れないように、おもしろい話から入ること。相手に分かりやすく、ゆっくり話すことが大切です。相手の質問には、的確に答えること。もし相手がキレたら、ビビらないで、ゆっくり返答してなだめること。ポイントは、ゆっくり分かりやすく、ビビらないで、話すことです。ね。!

実践事例 2

「紹介・宣伝」の学習と評価

「三分間スピーチ―自分を語る、仲間を語る」の指導

一 「紹介・宣伝」の学習の意義

「自己紹介・友人紹介・スピーチ・ブックトーク・プレゼンテーション・語り」など、「紹介・宣伝」に関する学習は、「相手にわかりやすく話す」ことの基本を身につけることができる。これらは、事前に言葉を準備し、繰り返し練習することが可能だからである。特に、自分の考えを即座にまとめられず、話したり発言したりする機会を逸している生徒にとって、人前で話をする有意義な経験となるであろう。

ただし、「紹介・宣伝」系統の授業では、話す時間より、聞く時間のほうが多くなるのが一般的である。「話すこと」に偏らず、「聞くこと」の基本学習についても、ていねいに指導する場としたい。

二 この学習で育てたい「話す力」

音声言語で自己を表現することに関して、てらいなく

がらメモをとる状況にない生活の場では、内容を聞き逃す確率は、さらに高いものになるかもしれない。

また、話を最後まで聞けない生徒、場をわきまえて聞くことができない生徒も増えており、話の途中で質問したり、口をはさんだりする生徒も多く見かける。

「紹介・宣伝」の学習においては、話し手と聞き手の役割が、瞬時に交替することはない。話を最後までしっかりと聞き、内容を正確に理解する力を育てるとともに、場をわきまえた、失礼のない聞き方、あるいは、話し手を支えるような聞き方ができるよう指導したい。

二 指導の計画

「三分間スピーチ―自分を語る、仲間を語る」(一年生)

◎ 指導の目標

- ・話し手として、相手意識をもってコミュニケーションしようとする能力・態度の向上を図る。
- ・聞き手として、より良いコミュニケーションを成立させようとする能力・態度の向上を図る。
- ・話し手と聞き手の心の通じ合いや、温かな人間関係づくりを図る。

行える生徒が増えてきた。しかし、その力が発揮されるのは、言葉や内容がさほど吟味されない場や、仲間意識の強い特定の集団の中に限定されてしまうことが多い。改まった場や大勢の前では、メモを読み上げたり、覚えた言葉を単調に読むような話し方をしてしまったりと、という生徒がまだ多く見られるし、自己表現を極端に不得手とする生徒も少なからずいる。

先に述べたように、「紹介・宣伝」の学習では、事前に言葉を準備し、繰り返し練習することが可能である。この利点を生かし、公的な場でも私的な場でも、その時々状況や相手・目的に応じて、自分で構築した話を自分の言葉で話す経験を積みませ、人前で話すことに自信のもてる生徒を育てたい。

この学習で育てたい「聞く力」

最近では、機器を活用して、ペーパーテストで「聞く力」を判定する試みが多く見られるようになってきた。例えば、正答率八〇%の生徒の「聞く力」は、「おおむね良好」と考えがちだが、誤答率二〇%と見ることもできる。誤答率一〇%だとしたら、日常、五つの指示を出したとき、一つは聞き逃していることになる。しかもテストでは、「メモをとってもよい」場合が多く、聞きな

コミュニケーション学習を充実させる際に重要なのは、すべての生徒が心を開き、豊かに話せる環境を保障することである。そのためには、互いの話をしっかりと聞き合う雰囲気が必要である。相手の話をからかったり、茶化したりせず、聞き手が真剣に聞くこととすれば、話し手は心を開き、伸びやかに声を発するようになる。話の内容が豊かになれば、聞き手はそれを享受し、さらに真剣に聞くこととする。良い聞き手が良い話し手を育て、良い話し手が良い聞き手を育てるのである。

◎ 学習の流れ

(第一次・第二次は各一時間、第三次は帯単元)

【第一次】・学習の目的と学習過程を知る。

- ・話すテーマを決め、構想を練る。

【第二次】・グループに分かれて、お互いのスピーチを聞き合う。

- ・より良い聞き方について話し合う。

【第三次】・全員の前で、一人ずつスピーチをする。

三 指導と評価の実際

【第一次】

・「わたしの好きな言葉」「うれしかったできごと」「友達から学んだこと」など、前向きな気持ちになれるテーマを設定し、生徒に選択させた。テーマを自由としなかったことで、話題選びにかける時間も少なくてすんだ。

・それぞれのテーマについて、教師自身がスピーチを行い、モデルを示した。実際にスピーチを行うことで、生徒が話し手としてつまずきそうな点や、聞き手の状況を、教師自身が把握できるという利点もある。さらに、教師が自身の内面を伝えることで、生徒の学習意欲にもつながられた。

・原稿を読むだけの発表にならないよう、スピーチ内容の原稿は書かせなかった。ただし、話し始めと話し終わりの言葉だけは決めて、これを覚えるように指示した。初めの言葉を覚えておけば、出だしでつまずくことは防げるし、終わりの言葉を覚えておけば途中で混乱しても、きちんと締めくくることができると考えた。

【第二次】

・四人のグループをつくり、まず二人一組になって練習させた。すなわちAは、B、C、Dに対して計三回スピーチを行うことになる。最終的には全員の前で発表することになるのだが、集中して話しやすい二人単位で繰り返し練習させることで、人に向かつて話すことの抵抗感を和らげるよう意図した。

・「話すこと・聞くこと」の技能を身につけるために、話し手に対しては、「声の大きさ、話す速さ、発声、発音、間、姿に留意して話すこと」と、聞き手に対しては「話の途中で声をかけないこと」と、話し手を見て聞くこと（アイコンタクト）を指導した。

・それぞれのスピーチを聞き終えた後、良かった点と改善点を聞き手に述べさせた（口頭による相互評価）。また、グループ全員のスピーチを聞き終えた後、話の内容が適切に相手に伝わったかどうかを自己評価させた。（資料1）

・第二次の最後では、全員で「うれしい聞き方」を整理し、「目を向けて聞く」「うなずきながら聞く」

「微笑みながら聞く」「終わったときに、心から拍手をくれる」などの聞き方が、話し手の心を和らげ、話しやすい雰囲気をつくることを確認した。ここに出た項目は、第三次の、「聞き手としての自己評価」の観点とした。（資料2）

【第三次】

・第一次・第二次は、連続した時間で、話すこと・聞くこと」の基本を指導したが、第三次は、帯単元として基本事項の習慣化を図ることをねらいとした。特に「聞くこと」に関しては、先に整理した観点を、各自が毎時間自己評価することによって、聞く態度の向上につながった。それが、話し手の真剣さにつながり、「仲間を知ること」の達成に結びついていった。スピーチを聞き、質疑応答を行った後、五センチ四方のカードに、発表者への感想を手紙形式で書かせた。カードは、内容を正確に聞き取れているかや、聞き方を把握する評価資料ともなった。また、発表者には、もらったカードをノートに貼るよう指示した。クラスメイト全員からの言葉がノートに残ること、以降の活動の意欲につながった。

四 学習を終えて

「話すこと・聞くこと」における自己評価や相互評価は、学習目標を意識させたり、さらなる意欲をもたせたりするために有効である。このことを踏まえて授業を組み立てると、評価のための評価に陥らず、自己評価力を育む活動とすることができる。

一方で、客観性のある評価を行うためには、指導者の観察が最も重要である。特に「話す力」は個人差が大きいため、例えば「声の大きさ、話す速さ、発声、発音、間、姿勢、視線」など話し方に関する能力や、「題材、情報、組立て」など内容に関する能力をよく観察して見極め、個別に整理して指導に生かすことが大切である。（資料3）

また、「紹介・宣伝」の学習では、場の雰囲気を整えることも重要である。机の有無を含めた座席のレイアウトはもちろん、指導者の位置や聞き方なども、話し手・聞き手のそれぞれに微妙に影響を与える。評価者としてではなく、良い聞き手の一人として場に存在しながら、話し手と聞き手の双方を確かに評価できる位置取りなど、今後も考察していきたい。

資料1 話し手自己評価シート

資料2 聞き手自己評価シート

資料3 教師の評価シート

実践事例 3

「話し合い・交流」の学習と評価

「秋の一句をめぐるミニ句会」の指導

一 「言葉」をめぐる話し合いの場を

中学三年生の文化祭に展示する作品として、俳句を作ることにした。俳句の鑑賞は教科書で行っており、俳句の形式や季語などの約束事は、すでに学習している。実際に俳句を作る場をもち、五・七・五の世界の中で、どんな言葉を使って表現するかを考える経験をすれば、もつと俳句が身近なものになるはずだ。

また、お互いの作品を鑑賞し合い、感想を述べ合ったり、友達の工夫を評価したりする学習は、国語教室における「話し合い・交流」の場として、ふさわしいものと思われる。

「句会」という形式を、中学生にも可能な形にアレンジして、「話し合い・交流」の場を利用し、感想を交流しながら、「言葉」についての意識を高める学習を計画した。

二 指導の計画

「秋の一句をめぐるミニ句会」(三年生)

◎指導の目標

- ・ 俳句を作ること、俳句の表現への意識を高める。
- ・ 友達の感想に自分の感想を重ね、感想を交流すること、俳句を深く味わう。

◎学習の流れ

1 モデルとなる俳句を読む。

まず、生徒が自分の俳句を作る際に、そのモデルとなるような作品をいくつか紹介する。教科書に載っている質の作品より、生徒たちにとって、もう少し身近なもの、ほづが、モデルとして適している。語彙などもあまり難しくなく、これなら自分でも作れそう、と思えるようなものである。今回の学習では、土家由岐雄『少年の日』(斎書房)から十五の句を抜粋した。このほかに、『子ども俳句歳時記』(蝸牛新社)なども参考になる。

後に、句会を行うことを意識して、紹介した十五の句の中から、気に入った句を二句選び、選んだ理由を書く。選んだ理由が、鑑賞の視点となるので、俳句のどのような点に注目して選べばよいかを、「選句の視点」として示しておくとい。

また、学習の中心となる「句会」をイメージさせるた

めに、感想がよく書けた生徒数名を指名して、「句会」の流れを示す。ここでの司会は教師が行い、発言の際の注意なども、流れの中で確認する。

2 俳句を作る。

「句会（話し合い）」の材料となるのは、各自が作る俳句である。「秋の一句」というテーマなので、五音で言える「秋らしさを感じるもの」をいくつか挙げさせ、その中から俳句の材料を選ばせる。モデルとなる作品を読んでいるので、生徒たちも、あまり苦勞せずに学習を進めることができた。

句作のための時間は、二十分程度とした。時間内に終わらない場合は家庭学習としたが、ほとんどの生徒は時間内に書き上げていた。

話し合いの質を高めるためには、話し合いの材料となる俳句の質も高める必要がある。笑いをとるためだけの五・七・五にならないためにも、「良い句」のイメージを教師がきちんと伝え、書けない生徒に支援するなどしたい。

3 「句会」を行う。

六・七人で一つのグループとし、クラスに六つのグループを作る。グループの構成は教師が指示するが、リーダーを決めておき、そのリーダーを中心に、意見が述べ

やすいグループとなるよう配慮した。

できた俳句は、名前を伏せて一覧にし、その中の十五句程度を、グループで分担して話し合う。まず、自分が担当した作品の中から三つを選び、感想を準備させる。「話す内容」「話すべきこと」の評価は、この感想の内容によって行う。よく書けていない生徒には、言葉を書き足すなど、助言する。

感想が書けたら、それをもとに「句会」を始める。このとき留意したいのは、生徒が、スムーズに話し合いの中に入れるよう、準備させることである。そのために、感想の用紙を回収し、教師がチェックするとともに、言葉添えておくことで、まず話し合うことへの不安を取り除いておきたい。話し出しの一言を、赤ペンで書いておくだけでもよい。

「句会」は次のような手順で行った。

司会者の指示で、順番に、気に入った俳句を三句ずつ二回繰り返し読む。記録の係は、票が入った句の上に、その句を選んだ人の名前を書く。全員が発表した後、司会者は、どの句に多く票が入ったかを確認し、多く票が入った句についての感想を順に述べさせる。このとき、必ず前の人の感想に重なるような一言を入れるようにする。

感想を述べ合う時間は三分とする。三分たったら、感想の交流を打ち切り、教師が講評する。

聞き手は、話し合いの様子を聞いていて、気づいたこと・感じたことなどをメモする。

三 評価で心がけること

「話す・聞く」の学習では、評価すべき材料が、音声としてその場で消えてしまったため、評価が難しい。

実際に、その場で評価できることは限られているので、話し合いの最中に、「あっ、声が小さい。」と思ったらすぐにその生徒のそばに行って、「このくらいの声でお願い。」とお手本を示したり、メモから目を離さない生徒には、「もう少し『語って』くれる？」とささやいたり、その場その場で行うように心がけたい。

同時に、評価の材料は、できるだけ形に残せるようにしたい（資料1）。今回の学習における評価の観点は、「話し方・話す内容・聞き方」の三つとし、生徒たちには、学習の前に、教師が何をどのように評価するかを伝えておいた。

ア「話し方」…「句会」の際の声や表情、自分の考えを伝えようとする姿勢があるかなどで、授業の場で、簡単にA・B・Cをつける。今回は、前の人の話を

受けて話すことを課題としたので、その点ができていたかどうかも含め、気づいたことがあれば、メモしておく。

イ「話す内容」…俳句の感想を書く段階で、話すための準備として書いたものを評価材料とする。

ウ「聞き方」…話し合いの様子を聞いているときのメモを参考にする。感想の交流を、聞き手としてのどのように受け止め、自分は……と考えることができたかどうかを、「聞くこと」の評価とする。

教師が行う評価とは別に、自分の「話し方・聞き方」について考え、自分自身の課題に気づくことも大切である。授業のまとめに代えて、「学習の振り返り」という自己評価を行うこともできる（資料2）。教師が一連の学習でどんな力をつけたかったのか、それは達成できたのかを、生徒が確認するためである。

生徒たちの自己評価は、あくまでも「自分はどうだったか」を振り返るためのもので、教師の評価に反映させたりはしないが、真剣に学習に取り組み、自分で課題に気づくことこそが、評価の根幹である気もする。

評定にかかわる評価は、主にテストで行う。実際に話し合いの場面を想定した放送問題を作ることもあるし、話し合いの場面を活字にして、「この場面で、あなた

ならどのように発言するか。」とたずねる問題も考えられる。

四 学習を終えて

今回の学習では、話し合う材料を、自分たちが作った俳句にしたことが効果的だった。その俳句のどんな点が魅力的かを話し合うので、教室全体が明るい雰囲気の中で学習を進めることができた。

また、それぞれの俳句の作者が教室の中にいるので、自分の句が選ばれると、ぱっと顔を輝かせる生徒もいて、ほほえましく感じた。

どんなテーマで話し合うことが中学生にとって価値があり、力をつけることにつながるのか、話し合いのテーマの発掘こそが、重要である。学んだことを確認するためのテスト問題の作成も、今後、より工夫したい課題である。

実践事例 4

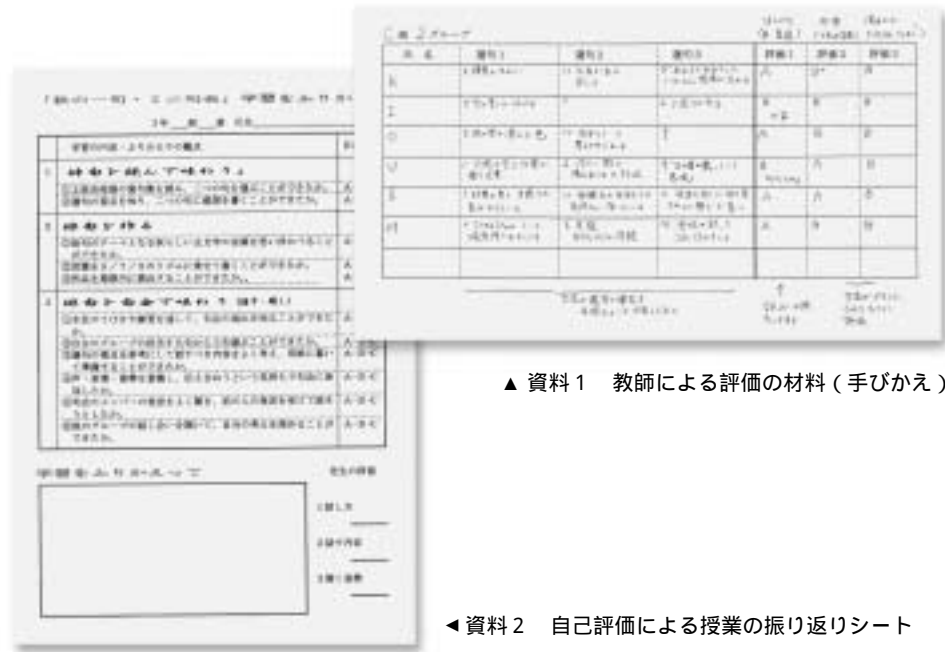
「読みを豊かにする話し合い」の学習と評価

「詩を読んだの話し合い」の指導

一 クラスの実態

「話し合い」の指導にはあまり自信がない、という教師は少なくないだろう。私自身、その一人だ。自分が生徒だったころを思い返しても、小学校高学年のころから「話し合い」にはほとんど参加できず、当てられないように、じつとつむいていたものだ。当時、「話すこと」や「聞くこと」の指導を受けたという記憶も薄い。指導されなかったためか、苦手意識を抱えたまま大人になってしまったという思いが、今もある。

だからこそ、目の前にいる生徒たちに同じ思いはさせたくない。「話すこと」に自信をもてる人間に育てたいと思うのだが、今のクラスの実態は、なかなか、こちらの思いどおりにはなっていない。ごく一部、活発に発言できる生徒も育ってはいるが、以前の私のように、読め



▲ 資料1 教師による評価の材料（手びかえ）

◀ 資料2 自己評価による授業の振り返りシート

てはいるのに、それを伝えようとはせず、ほかのだからが発言してくれるのを待っている生徒が大半だ。

クラスの人間関係や、生徒一人一人の性格など、さまざまな要因が考えられるが、国語科の責任も、もちろん大きい。自分を伝えようとする思いを育てようと、「国語科通信」にも生徒の感想などを頻繁に載せることを試みた。生徒は、自分の文章が載ることを喜ぶようになり、ほかの生徒の文章から、実にたくさんのことを学べるということにも気づき始めたようだが、それでも、「発言」となると、あまり変化が見受けられない。

教室で声が発表されるようにと、早口言葉や、詩の暗唱なども取り入れてみた。そのときは大いに盛り上がりを見せたが、その後の「話し合い」が活発になるところまではいかなかった。

どうすれば、「話し合う力」をつけられるかを考え、活発に発言できる授業、「話し合い」で読みの深まる授業として、三年生を対象に、「詩を読んだの話し合い」の授業を組んでみることにした。

二 指導の計画

「詩を読んだの話し合い」（三年生・二時間半扱い）

◎ 学習の目標

・自分の考えを発言する楽しさを知ると同時に、ほかの友達の考えを聞く楽しさを実感する。

◎指導の目標

・なるべく多くの生徒から、積極的な発言を引き出す。
・話し合いの中で、多くの友達の読みに触れ、自分の読みを深めたり広げたりさせる。

◎用いた教材

峠三吉「仮綴帯所にて」

三 活動の流れ

1 詩の朗読を聞く。

・詩を印刷したプリントを配布。教師の朗読を聞きながら、黙読する。朗読するときには、必要以上に感情を込めないようにした。難語句の解説も行ったが、最小限の言葉にしばらく、生徒から、疑問として出させるようにした。

2 プリントに書き込みをする。

・自分が読み取ったこと、予想したこと、疑問に思ったことなど、自由にプリントに線を引かせたり、書き込みをさせたりした。十分間で三か所以上という制限を設けたが、ほとんどの生徒は、多くの書き込みをすることができた。

3 プリントを提出する。

・生徒が書き込みをしたプリントを、その場で、すぐに発表させることもできるが、ここで、一旦教師に提出させ、それに目を通した。生徒一人一人が、何を、どのように考えているのかを、教師が把握し、次の「話し合い」活動に生かせるよう、メモ（後で触れる教師の「手びかえ」に残した）。

4 話し合う。

・書き込みプリントを返却する。次に挙手をさせ、発言したい生徒を指名した。どこで、だれを指名するかを考える際、先ほどの「手びかえ」を活用し、なるべく自主的な発言になるよう、同じところに線を引いた生徒に、続けて発言するように促した。聞いている生徒には、友達の発言は自分の書き込みとは違つベンの色にして、氏名とともに、友達の思いもプリントに書き込むよう指示した。

四 「手びかえ」の効用、メモの力

二時間の学習の中で、発言数は五十を超えた。三十人ほどのクラスであるから、平均一人一回は発言したことになる。それでも、ほかの生徒が見落としていることに気づいたり、すばらしい読みをしていたりするのに、

五 学習を終えて

今回の「話し合い」の授業は、教師のわずかな補いとまとめをもって終了した。いつもより充実した学習になったような気がしたので、「できれば、この詩についてだけでなく、この授業についても、感想を書いてほしい。」と言いながら、ごく短い時間で、生徒たちに感想を書いてもらった。

クラス全体に、「話し合い」を楽しむ雰囲気はあったものの、自分からはとうとう手を挙げなかった生徒や、私から指名されて無理やり発言していた生徒もいた。彼らが、どう感じたのか、ときどきしながら感想を読んだ。ある生徒の感想に、こう記されてあった。

「言いたかったけれど、どこで挙げるのか迷ってしまいました。でも、先生が当ててください、発言できてよかったです。ありがとございました。でも、突然だったの、うまく発言できず、逆に緊張してしまいました。（後略）」

「当ててください、……」。くださりですって？ 涙が出るくらい、うれしかった。

自分から手を挙げて発言しようとしないう生徒も少なくなかった。そうした生徒が、積極的に話し合いに参加するためには、今後さらに、「話し合う」授業のあり方を、工夫しなければならない。

課題は残るが、今回の学習を振り返ると、先に述べた「手びかえ」を利用したことが有効であった。生徒の様子を観察し、だれが、何を、どのように考えているかを知ること、だれに発言させ、次にだれを指名するかなどを決めるとき、「手びかえ」に書き記したメモが参考になった。「この生徒こそ。」という場面で、さりげなくその子を指名することができるので、指名された生徒も発言に窮することがなく、教師の側も、指名に及び腰にならなくてすむ。生徒の表情を見ればわかるというベテラン教師もいるだろうが、そこまでの自信がない私のような教師には、心強い味方であった。

また、「話し合い」のメモをしつかりとらせることによって、友達の発言を記録に残せたことは、生徒にとっても、教師にとっても、授業そのものを振り返り、評価し、次につなげる材料を得るために、たいへんに有効であったことも明記しておきたい。

